



株式会社不動テトラ
九州支店 土木工事部長

村岡 正行 さん
むらおか・まさゆき

1983年長岡工業高等専門学校卒、日本テトラポッド(現不動テトラ)入社。九州支店土木工事部工事課長、工務課長などを
経て2022年から現職。新潟県出身、62歳。

あの頃、 思い出の現場

常陸那珂港東防波堤築造工事
(その3)

JVへの参画で
港湾工事を
学ぶ

入社してからしばらくの間は河川や海岸などにおける消波ブロックの製作・据付工事に従事しており、作業船を使った海上工事とは関わりのない現場を長く担当していました。

環境が大きく変化したのは1993年のことです。水戸営業所に異動となり、常陸那珂港の沖合に防波堤を延伸する本格的な港湾工事に携わるようになりました。最初の現場は、運輸省第二港湾建設局(現国土交通省関東地方整備局)が発注した「常陸那珂港東防波堤築造工事(その3)」。

4社で構成するJVの4番手として参画した工事に担当技術者として配属されたのが、入社11年目で31歳の時でした。



消波ブロック製作・据付とは様相が異なる防波堤の築造工事に最初は戸惑いました。捨て石で基礎を構築し、その上にケーソンを据え付けて上部工を行うといった流れは理解していても、実際に経験したことがないため、具体的にどのような作業が現場で行われるのか分からず不安を感じていました。

JVは所長以下スポンサー企業から3人、サブ3社から1人ずつ計6人の体制で施工に臨むものでした。JVで施工に携わるのも初めてでしたので、新入社員のようにならざるを得ないことを学ぶことに徹しました。

現場に据え付けるケーソンは重量が8,000t級と大きなものであり、初めて見るそのスケールに圧倒されました。基礎部分を構築する捨て石マウンドのケーソン据付箇所は捨て石ならしには、急速施工のため機械ならしが採用されていました。現場では捨て石投入時のガット船の誘導とガット船の材料検収、捨て石ならしの測量を主に担当していました。ガット船や潜水士船、起重機船の上で過ごす時間が長く、現場の管理業務を終えて陸に上がった後もしばらくの間は船に揺られているような感覚が残っていたことを思い出します。捨て石マウンドの構築が終わり、初めてケーソン据付を経験した時、着底した瞬間の達成感は格別なものでした。

外海特有のうねりがある海上で大きなケーソンを据え付けるのですから、安全面には特に気をつけなければなりません。JV所長からもそのことを繰り返し指導いただきました。海の工事を熟知している経験豊富なJV職員の言葉は、施工管理を担う私にとって本当に勉強になるものでした。また、海象条件の厳しい港で防波堤築造工事を経験したことで、事前準備と決断力の大切さを学びました。海上での工事は危険も伴います。安全な施工に対する意識を高めながら、関係者間でコミュニケーションを密にすることの大切さを実感しました。担当する現場に従事する人たちとのコミュニケーションだけではなく、隣接工区の人たちと工事間の調整を行った経験も大きいものでした。常陸那珂港に従事する各社が集って野球の対抗戦を行ったことも良い思い出であり、そうした中で充実した時間を過ごすことができました。

常陸那珂港では、4回にわたってJVの一員として参画して防波堤築造工事に従事しましたが、各社特徴のあるならし機やケーソンを島状に据え付ける「単独函」、既設防波堤の間に据え付ける「はめ込み函」なども経験することができ、常陸那珂港で港湾工事を

学んだことは、その後の仕事にも生かされました。直江津港(新潟)や久遠漁港(北海道)、新居海岸(高知)、浜田港(島根)などの現場でもケーソン据付工事に従事することになりますが、台風等による手戻りが生じたときも、常陸那珂港で港湾工事を経験したことで無事に乗り越えられたと思っています。

2012年に配属となった九州支店では、工事課長や工務課長などを経て、2022年7月から土木工事部長として支店管轄の現場全体を管理する立場で仕事をしています。

私が現場に従事した頃と比べ、技術も進化し施工管理の方法も変化しています。変わらないのは、現場での協力会社の方たちとのコミュニケーションや安全管理ではないでしょうか。若い頃は現場に少し上の先輩がいて、日々指導を受けていました。今は中間層の人員が手薄なこともあり、所長の下に若手が就くケースも少なくありません。現場のOJTで仕事を覚えていくことに難しい面があることは否めません。

そうした中でも、若手の人たちにはさまざまな現場で経験を積めるように配置の調整を行っています。各自の希望も聞きながら、いろいろなことにチャレンジできる機会を作っていきたいと思っています。



進水前のケーソンの前で



(株)テトラ水戸営業所安全祈願(本人は前列右から3人目)